平安京右京一条四坊十三町跡

埋蔵文化財発掘調査報告書

２０１７

国際文化財株式会社

例　　言

1．本書は、京都市右京区花園伊町 41-7 における埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．本調査は、一般財団法人泉谷病院の計画する（仮称）泉谷病院人工透析センター増築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査である。文化財保護法（昭和 25 年法律第 214 号）第 92 条の規定により文文財第 871 号 (受付番号 16 H 429) の通知にて実施したものである。

3．調査の体制は、京都府教育庁指導部文化財保護課ならびに京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課の指導のもとに国際文化財株式会社が実施した。

4．発掘調査の面積は、66.00㎡である。

5．発掘調査は、平成 29 年 1 月 10 日～ 平成 29 年 1 月 30 日まで実施した。

6．発掘調査及び本報告書作成にあたっては、下記の体制にて行った。

国際文化財株式会社

西日本支店長　　森下　賢司

主任調査員　　河野　凡洋

調査員　　今村　克

7．発掘調査は主任調査員河野、調査員今村が担当し、整理作業は河野が担当した。

8．遺構、遺物の写真撮影及び本書の執筆、編集は河野が行った。

9．遺構図に使用した座標、水準測量は、テクノ・システム株式会社が行った。

10. 発掘調査及び整理作業、報告書作成にあたっては、下記の方々及び関係機関のご指導、ご協力を得ることができました。ご芳名を記して感謝の意を表します。

家﨑 孝治、馬瀬 智光、川井 健士、島津 功、嶋本 広行、長林 大、山田 功一、山田 邦和、吉川 義彦（五十音順）

京都府教育庁指導部文化財保護課、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所、一般財団法人泉谷病院、京都遺跡サービス株式会社、テクノ・システム株式会社

凡　　例

1. 遺構に使用した座標値は、世界測地系Ⅵ系に基づいており、方位は座標北を北として表記した。
水準点はＴ．Ｐ．値（東京湾平均海面値）を使用し、本文中では「Ｔ．Ｐ．」と略称している。
2. 色調については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄、1994）を使用した。
3. 遺構図は各図にスケールを掲載し、原則として縮尺を 40・100・200 分の１とした。
4. 遺物実測図は各図にスケールを掲載し、原則として縮尺を３分の１とした。
5. 本書に収録した各資料の図は、本書の体裁に合わせて整えるためにそれぞれ縮小した。
6. 本書に収録した図資料等の引用、参考文献、索引は、各章末に註として掲載した。
7. 遺構の分類は、下記の呼称を踏襲した。
掘立柱建物跡、柵列、溝、土坑、柱穴、礎石、園池、堀。
8. 遺物は全てに通し番号を付加した。実測図・写真図版共に一致している。
9. 出土遺物の精細な事項については、小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要第３号』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1996、小森俊寛「京から出土する土器の編年的研究 - 日本律令的研究・日本律令的土器様式の成立と展開、7 ～ 19 世紀 -」京都編集工房 2005、角田文衛他「第四部平安京の遺物」『平安京提要』(財)古代学協会・古代学研究所 1994 に従った。

本文目次

第１章　はじめに ・・・

第１章　はじめに

第１節　調査に至る経緯

今回の発掘調査に至る経緯は、京都市右京区花園伊町41-7（図２・３）にて一般財団法人泉谷病院が計画した（仮称）泉谷病院人工透析センター増築工事が予定されたことが発端となる。計画建物は、病院本棟の東側に隣接する駐車場跡地の約140㎡内に建設される。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地である「平安京跡（右京一条四坊十三町）」に所在する。

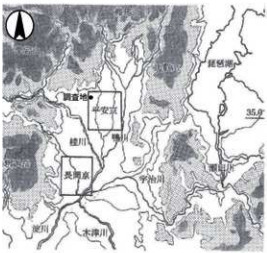


図１　調査地位置図（1：500,000）

平成28年11月に京都市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下、「京都市文化財保護課」という）は、これらの状況を踏まえて、建造物建設に伴う開発地域の遺構・遺物の有無、残存状況を把握するため、発掘調査の必要性があると判断した。これにより建造物を計画する一般財団法人泉谷病院と京都市文化財保護課との間において、調査の事前協議がもたれた。その結果、調査範囲は建物計画範囲の内、建物基礎部分66㎡を本調査することとなった。

発掘調査は京都府教育庁指導部文化財保護課、京都市文化財保護課の指導を受け、一般財団法人泉谷病院より委託を受けた国際文化財株式会社が行った。現地調査期間は平成29年１月10日～平成29年１月30日まで実施した。発掘調査の結果、調査地は平安時代から中世には機能していたと考えられる園池跡の一部であることが確認できた。

第２節　調査の経過

今回の調査の体制と方法を決めるために、周辺の調査によって得られた遺構・遺物の成果や今日までの研究について精査し、検証を行った。周辺では京都市埋蔵文化財研究所によって、1990年の道路建設に伴う発掘調査（註1）、1996年の西日本旅客鉄道山陰本線立体交差化事業および花園駅周辺の整備事業に伴う発掘調査（註2）、2004年の泉谷病院移転改築工事に伴う発掘調査が行われている（註3）（図７）。1996年１次３区の発掘調査地は当調査地の南側に隣接しており、園池跡東岸の州浜が検出されている。2004年の発掘調査地は当調査地の西側に隣接しており、園池跡西岸の州浜、東西方向の岸から南へ張り出す半島の一部と考えられる州浜が検出されている。

これらの周辺の発掘調査成果から、当調査地も園池跡の一部に当るため、これらに類する成果が得られるものと考えられた。1996年の調査で検出された州浜は北へ向かって続いているため、調査区の東側で州浜の一部が確認される可能性があると考えられた。

調査体制としては、主任調査員１名、調査員１名の配置を行った。また、京都市文化財保護課の指導により、学術研究に基づいた調査を行うため、調査検証委員会を設立し、同志社女子大学現代社会学部博士（文化史学）山田邦和教授に委員を依頼した。

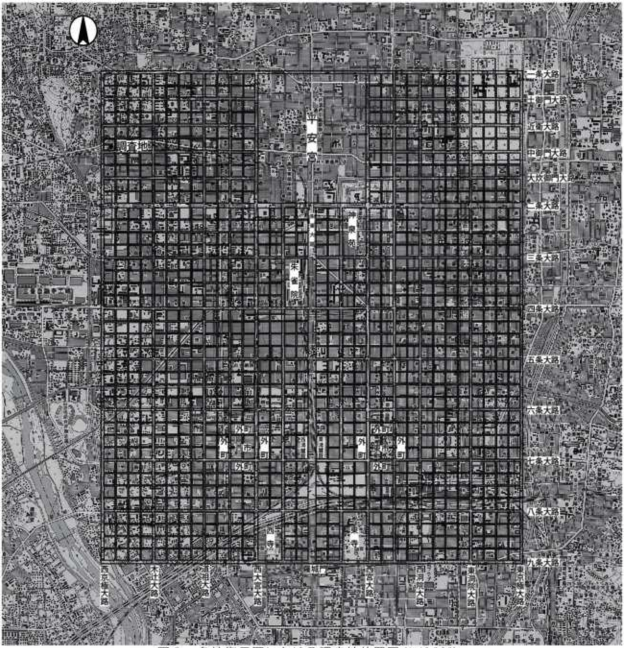


図２　条坊復元図における調査地位置図 (1:40,000)

計画予定地の範囲は狭く、調査区を全面掘削した場合に排土置場を確保することが困難であったため、調査区を東西に分け反転掘りによる発掘調査となった。また、調査区内の南西部分には大型の電気ハンドホールが設置されていた（図４）ため、その部分の調査は断念した。

基準点は K01　X=-108792.975　Y=-25622.637　H=41.77、K02　X=-108795.811　Y=-25635.653　H=41.47、K03　X=-108801.605　Y=-25627.952　H=41.59 を設置した。

平成 29 年 1 月 10 日より調査区内の南西部分の電気配線の移設、既存のアスファルトの切断、撤去及び、仮囲いの設置を行い、平成 29 年 1 月 12 日までにトイレ、調査道具類の搬入等を行った。

平成 29 年 1 月 13 日に調査区東側から調査を開始した。上層には近代盛土があり、その層を掘削した。その後に調査区東南隅を地山面まで断割りし下層を確認した。近代層以下は 4 層あることを確認したが、州浜と考えられる層が確認できなかったため、園池内部であると考え 1 層ごと掘削する方針とした。

平成 29 年 1 月 18 日までに園池跡の掘削を終了し、地山面で検出した自然流路の掘削を行った。

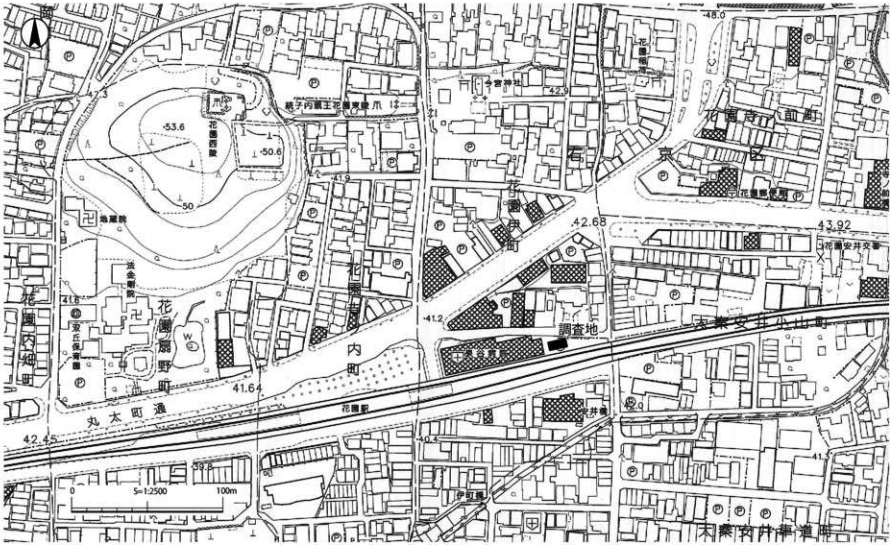


図 3　調査地位置図（1:2,500）

（京都市都市計画基本図 1:2,500「花園」に加筆）

平成 29 年 1 月 19 日に調査区に東側の埋戻し作業を完了し、調査区西側の調査を開始した。東側の調査により園池内部であることを確認していたため、東側同様に近代盛土掘削後は 1 層ごとに掘削を行った。

平成 29 年 1 月 24 日に電気ハンドホール北側部分を残して園池跡の掘削が終了、下層の自然流路の検出と掘削を行った。

平成 29 年 1 月 25 日に終了部分を埋戻して電気ハンドホール北側部分を掘削し、下層を確認した。終了後は埋戻しを行った。

平成 29 年 1 月 26 日に埋戻し後の整地作業、フェンス撤去、調査道具類の一部撤収作業を行い、1 月 28 日までにトイレ、フェンスなどの撤収作業を行った。

平成 29 年 1 月 30 日に一般財団法人泉谷病院に引き渡しを行い調査を終了した。

＜参考文献＞

（註 1）財団法人京都市埋蔵文化財研究所「平成元年度　京都市埋蔵文化財調査概要」1994 年

（註 2）財団法人京都市埋蔵文化財研究所「平成 8 年度　京都市埋蔵文化財調査概要」1998 年

（註 3）財団法人京都市埋蔵文化財研究所「平安京右京一条四坊十三町跡」2004 年

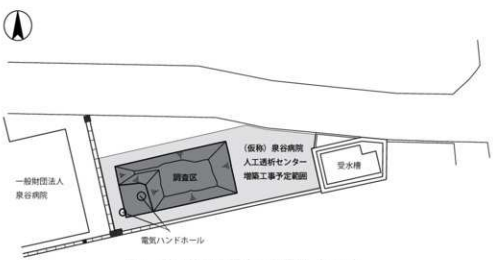


図 4　計画範囲と調査区配置図（1:400）

図 5　調査区東側作業風景（北から）

図 6　調査区西側作業風景（南から）

第２章　位置と歴史的環境

当調査地は京都盆地の北西に位置し、現在の行政区分では京都市右京区花園伊町 41-7 に属する。西日本旅客鉄道の山陰本線の円町駅から花園駅区間の高架下に位置し、西側には花園駅がある。また、北西には五位山法金剛院、北には正法山妙心寺、東と南には宇多川が流れる場所に位置している。

平安京条坊復元図（註4）にあっては、右京一条四坊十三町の南東部分で、東二行、北六門内に位置している。『拾芥抄』の「西京図」では当町は無記名になっている。十三町の西側には平安京の西辺にあたる西京極大路が位置していた。平安時代前期には西京極大路を挟んだ西側に清原夏野の山荘が営まれ、末期になると待賢門院璋子によって法金剛院が建立された。

周辺では 1990 年（註5）、1996 年（註6）、2004 年（註7）に財団法人京都市埋蔵文化財研究所によって発掘調査が行われている。1990 年の調査では平安時代後期の杭による護岸施設を伴う溝が検出されている。1996 年の調査では花園駅周辺で法金剛院の施設や園池跡が確認され、また十三町内では平安時代末から中世にかけての園池跡の東岸州浜、南岸州浜が検出されている。2004 年の調査では 1996 年の調査で検出された東岸州浜に対する西岸州浜が検出され、また半島と考えられている部分からも州浜が検出されている。これら発掘調査の成果から町内の南半分を占める園池のある 1 町規模の邸宅跡の存在が考えられている。鎌倉時代以降は園池は耕地に転用され、明治時代まで利用されていたことが判明している。

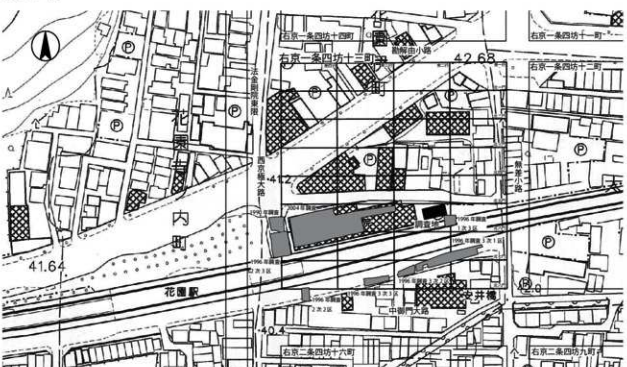


図７　周辺調査地位置図（1:2,000）（京都市計画基本図 1:2,500「花園」に加筆）

＜参考文献＞

（註４）辻　純一「条坊制とその復元」財団法人　古代学協会・古代学研究所編「平安京復元」角川書店 1994 年

山田邦和「右京全町の概要」財団法人　古代学協会・古代学研究所編「平安京復元」角川書店 1994 年

（註５）（註１）に同じ

（註６）（註２）に同じ

（註７）（註３）に同じ

第3章　遺　構

第1節　基本層序

調査区内における基本層序（図8）は現地表面から順に現代盛土、第1層は黒褐色粘質土（近代耕作土）、第2層は礫が多量に混ざる黒褐色粘質土、第3層は礫が少量混ざる黒褐色粘質土、第4層は黒褐色粘土である。この内、第2層から第4層までは園池跡の堆積で、第4層掘削後の地山面にて検出した第5層は地山面と自然流路1、2上面を覆っていたため、両流路埋没後に近隣から流れた土の堆積であると判断したが、最終段階の自然流路であった可能性がある。第6層以下は自然流路の堆積である。

調査は第1層から順に実施していったが、ここでは園池跡を第1面目、自然流路を検出した地山面を第2面として記す。当調査地においては、平安時代以前の遺構や平安時代以降でも園池跡以外は検出していない。

第2節　遺　構

調査は調査地全体の面積が狭少であったため、反転しての調査となった。また、現代盛土にはかなり大きめの礫が混ざっていたため、安全性を考慮して法面を付けての掘削となった。さらに、調査区南西には電気ハンドホールが設置されていたため、全体的に掘削できる範囲が狭まった。

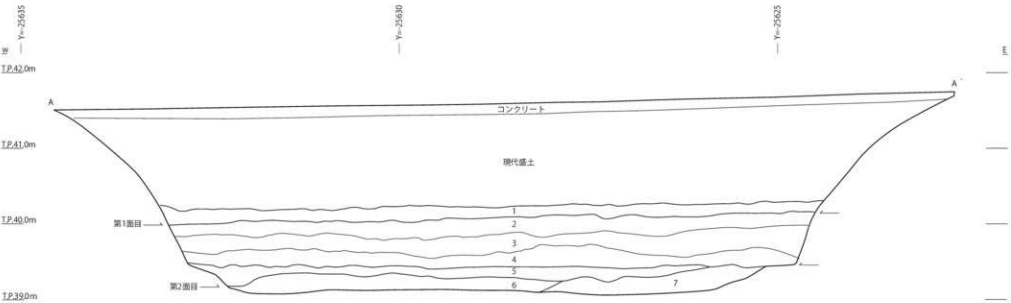
第2面目の遺構

自然流路1（図8・10　図版1・2・3）調査区の西側で北東から南東にかけて検出した自然流路である。西側を自然流路2に切られる。検出面で長さ4.3m、幅0.7から2.0m、深さ0.3から0.5mである。堆積土には礫が少なく明黄褐色細砂が主となっていた。遺物は出土していない。

自然流路2（図8・10　図版1・2・3）調査区の東側で北東から南西にかけて検出した自然流路である。西側は西壁に入り込む。検出面で長さ2.1m、幅4.4m以上、深さ0.15から0.25mである。堆積土は暗褐色の砂礫土である。遺物は出土していない。

第1面目の遺構

園池跡（図8・9　図版1・2・3）調査区の全面に広がる園池跡を検出した。調査実施直後の南東隅の断割りにて州浜などが確認できなかったため、園池跡の内部と判断し調査を行った。第2層は0.15から0.3mで堆積しており、平安時代末期から近世の遺物が混在して出土した。第3層は0.1～0.4mで堆積し、第4層は0.15から0.3mで堆積しており平安時代末期から鎌倉時代（京Ⅶ｜京都Ⅵ｜期段階）の遺物を中心として出土した。



1　2.5Y3/1 黒褐色粘質土
2　2.5Y3/1 黒褐色粘質土粗砂混り（φ0.5 ～ 5.0cm 程の礫を多量含む）
3　2.5Y3/1 黒褐色粘質土（φ3.0 ～ 10.0cm 程の礫を少量含む）
4　10YR3/1 黒褐色粘土
5　2.5Y4/1 黄灰色砂礫土
6　7.5YR3/4 暗褐色砂礫土≪自然流路 2≫
7　2.5Y6/6 明黄褐色細砂土（10Y8/1 灰白色シルトをブロック状に少量含む）≪自然流路 1≫

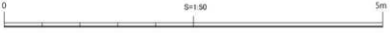


図 8　北壁土層断面図（1：50）

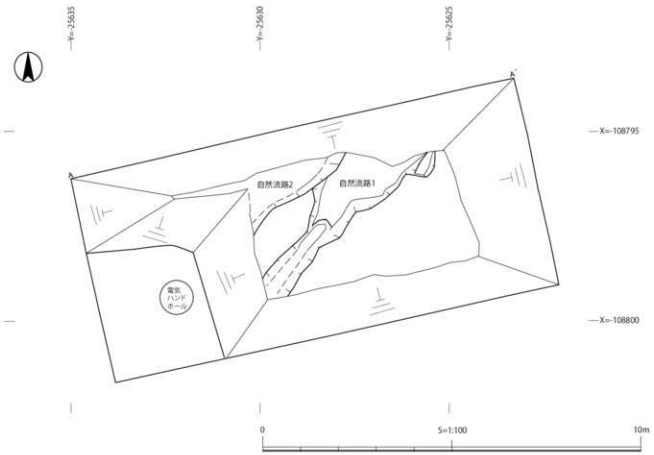


図 9　2 面目遺構平面図（1：100）

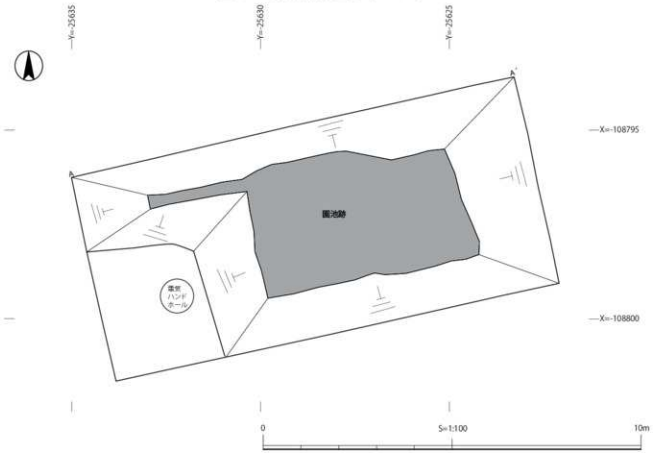


図 10　1 面目遺構平面図（1：100）

第４章　遺　物

第１節　遺物の概要

今回出土した遺物はコンテナに２箱で、土師器、須恵器、輸入磁器、焼締陶器、近世陶磁器、瓦器、石製品、瓦が出土している。遺物の時期は平安時代末期（京Ⅶ［京都Ⅵ］期）から江戸時代に至るまで出土している。

今回の調査地の西隣、南隣では園池跡が検出されている。そこでは平安時代末期から鎌倉時代の遺物を中心に出土している。当調査区もその一部であるため、第３層、第４層では同様な時期（京Ⅶ［京都Ⅵ］期段階）の土師器皿が中心となり、瓦器碗、鍋、羽釜、滑石製石鍋などが出土している、上層ではそれらに混ざり江戸時代の陶磁器の破片や桟瓦の破片なども出土している。

表１　出土遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
平安時代後期～鎌倉時代	土師器、須恵器、輸入磁器、焼締陶器、瓦器、石製品、瓦		土師器６点、瓦器３点、瓦２点		
室町時代	陶器				
近世	陶器、磁器、桟瓦				
合計		２箱	11点（1箱）		1箱

※コンテナ箱数の合計は、整理後Ａランク遺物を抽出したため出土時より１箱多くなっている。

第２節　出土遺物

園池跡出土土器（図11　図版4） １から６までは土師器皿である。１は口縁を内側に折り曲げて作るいわゆるコースター型の皿である。２から６までは体部内面から体部上位外面まで一段ナデされている。６はやや強めの一段ナデが施されており体部下位との境目に段がつく。１、３から６は京Ⅶ［京都Ⅵ］期段階に属し、２は京Ⅷ［京都Ⅶ］期古段階のものである。７から９は瓦器で７は椀で内面はヘラミガキされている。８は鍋で内面は横方向にナデられ、外面には煤が付着している。９は羽釜である。口縁部は内傾し横方向にナデ調整されている。鍔は口縁部下に付けられており、外面には煤が付着している。10、11は丸瓦である。10の凸面は縦方向にナデ調整されており、凹面には粗い布目痕が残る。玉縁は横方向に強くなでて造り出している。11は凸面に斜格子目叩き痕が残り、凹面には布目痕が残る。2、7、11は第３層出土、１、３から６、８から10は第４層出土。

図 11　園池跡出土遺物

（2、7、11 は第 3 層出土、1、3 から 6、8 から 10 は第 4 層出土）

第5章　総　括

今回、発掘調査を実施した京都市右京区伊町 41-7 は平安京右京一条四坊十三町に相当し、調査地は十三町内の東南部、東二行、北六門内に位置している。同町内では公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所により 1990 年、1996 年、2004 年に発掘調査 [註8] が実施されている。1996 年の発掘調査では 1 次 3 区で園池跡の東岸州浜、3 次 1 ～ 3 区で東岸州浜、南岸州浜が検出されている。また 2004 年の発掘調査では園池跡の西岸州浜、南へ張り出す半島の一部と考えられる州浜が検出されている。園池跡が機能していた時期は 1996 年の発掘調査では 3 時期、12 世紀前半、13 世紀、14 世紀とされ、2004 年では 2 時期、12 世紀前半、12 世紀半から 13 世紀初頭とされている。いずれも造成時期は平安時代後期の 12 世紀前半とされている。

本調査地は 1990 年 1 次 3 区の北側に位置するため、園池跡の東岸州浜などが調査区東側で検出される可能性があるとして発掘調査を開始した。開始直後に行った東南隅の断割りにおいて州浜の堆積と考えられる土層は確認できなかった。そのため、1996 年、2004 年の調査成果（図 12）から調査区は園池跡内の一部であると判断した。

以下、園池跡の総括を記す。

発掘調査時は図 8 の第 2 層から第 4 層が園池跡に相当するものと考えていた。しかし、第 2 層では平安時代末期から近世の遺物が混在するため、2004 年の発掘調査で古い耕作土とされた暗褐色砂泥層に相当するものと判断できる。第 3 層の出土遺物には京Ⅷ [京都Ⅶ] 期古段階の土師器皿を含むが、第 3 層、第 4 層ともに京Ⅶ期 [京都Ⅵ] 期段階の土師皿を中心とした遺物が出土している。その中には、京Ⅵ [京都Ⅴ期] 新段階から京Ⅷ [京都Ⅵ] 期中段階にかけて増加するとされる鍋、羽釜などの瓦器煮炊具や、この時期以降に出土するとされている常滑の焼締陶器の甕も第 4 層から出土している [註9]。そして、京Ⅵ [京都Ⅴ] 期段階 [註10] で 12 世紀代の体部上位から口縁部にかけて二段ナデされる土師皿を確認していない。そのため、京Ⅶ期 [京都Ⅵ] 期段階の 12 世紀末から 14 世紀にかけて埋没していったものと考えられる。

しかし、地山面で園池跡以前の建物跡などの遺構は検出していない。また、自然流路上層の第 5 層や自然流路からも遺物が出土していないため、周辺調査の成果と同様な時期変遷を推察することは困難である。

今回の調査では、園池跡の東岸は調査区よりも東側にある事は確認できた。そして、調査区は 12 世紀前半に造成された園池にあって、各調査成果の 2 時期目に当る 12 世紀末頃からは埋没が始まったと言える。

〈参考文献〉

（註8）註 1、註 2、註 3 に同じ

（註9）註 8 に同じ

（註10）註 8 に同じ

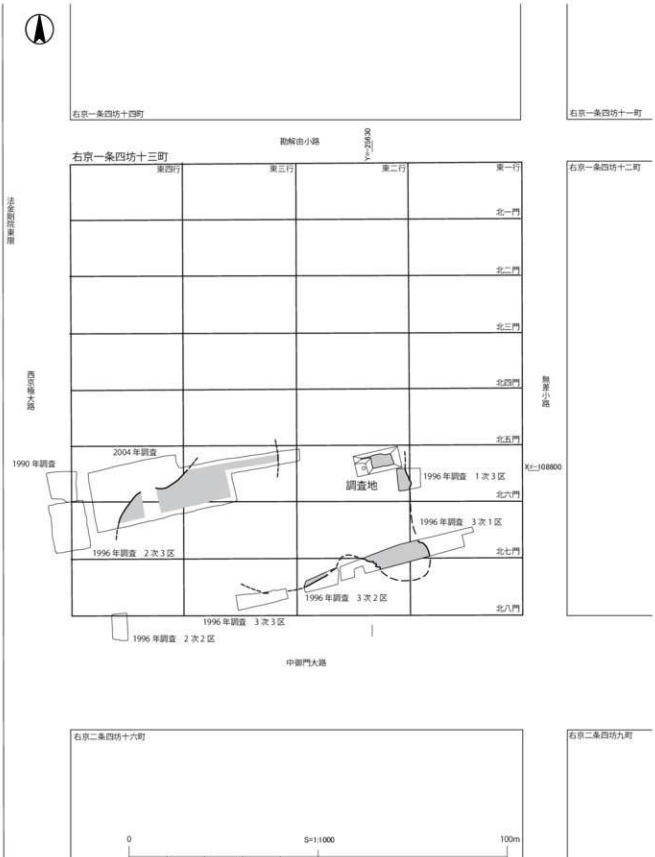


図 12　周辺調査成果による園池跡州浜ラインと調査地（1:1,000）
（註 3 を参照して作成）

表 2　遺物観察表

※法量のカッコ内は土器の口径・底径は復元、器高は残存、瓦はいずれも残存

挿図番号	図版番号	遺構 層位	器種 器形	法量（cm）	色調	調整
図 11-1	図版 4-1	第 4 層	土師器皿	口径：(8.0) 器高：1.0 底径：(8.0)	内外面：10YR8/2 灰白色	底部内面から体部外面にかけて横方向ナデ（コースター型）。
図 11-2	図版 4-2	第 4 層	土師器皿	口径：(8.0) 器高：1.3 底径：(4.6)	内外面：10YR7/2 にぶい黄橙色	体部内面から外面にかけて横方向ナデ（一段ナデ）、底部内面はナデ。
図 11-3	図版 4-3	第 3 層	土師器皿	口径：(8.4) 器高：1.5 底径：(6.6)	内外面：10YR8/2 灰白色	体部内面から外面にかけて横方向ナデ（一段ナデ）、底部内面はナデ。
図 11-4	図版 4-4	第 4 層	土師器皿	口径：(9.8) 器高：1.9 底径：(6.6)	内外面：10YR8/3 浅黄橙色	体部内面から外面にかけて横方向ナデ（一段ナデ）、底部内面はナデ。
図 11-5	図版 4-5	第 4 層	土師器皿	口径：(11.2) 器高：1.5 底径：(8.0)	内外面：10YR7/4 にぶい黄橙色	体部内面から外面にかけて横方向ナデ（一段ナデ）、底部内面はナデ。
図 11-6	図版 4-6	第 4 層	土師器皿	口径：(11.6) 器高：1.9 底径：(9.8)	内外面：10YR8/2 灰白色	体部内面から外面にかけて横方向ナデ（一段ナデ）、底部内面はナデ。
図 11-7	図版 4-7	第 3 層	瓦器椀	口径：— 器高：(1.4) 底径：(5.2)	内外面：N4/ 灰色	内面はヘラミガキ、外面はナデ。
図 11-8	図版 4-8	第 4 層	瓦器鍋	口径：(23.2) 器高：(5.0) 底径：—	内面：N5/ 灰色 外面：10YR2/1 黒色	内面は横方向ナデ、外面ナデ（指頭圧痕残る）。
図 11-9	図版 4-9	第 4 層	瓦器羽釜	口径：(29.0) 器高：(5.3) 底径：—	内面：N6/ 灰色 外面：N3/ 暗灰色	口縁部外面、鍔は横方向ナデ、体部外面はナデ。
図 11-10	図版 4-10	第 4 層	丸瓦	長さ：(10.6) 高さ：(5.8) 幅：　(8.2)	凸面：N4/ 灰色 凹面：N3/ 暗灰色	凸面は横方向ナデ、凹面には粗い布目痕が残る。玉縁は横方向ナデ。
図 11-11	図版 4-11	第 3 層	丸瓦	長さ：(10.3) 高さ：(7.0) 幅：　(7.2)	凸面：2.5GY6/2 灰色 凹面：2.5Y4/1 黄灰色	凸面は斜格子目叩、凹面には粗い布目痕が残る。

図　版

図版1　遺構

1　調査区東側園池跡完掘状況（東から）

2　調査区東側自然流路１（東から）

図版2　遺構

1　調査区西側園池跡完掘状況（東から）

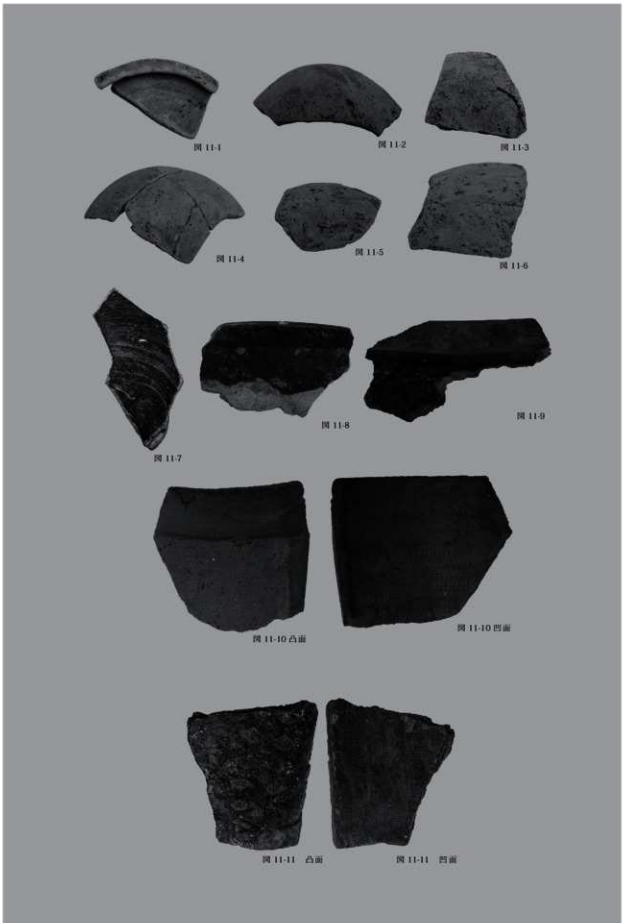
2　調査区西側自然流路1・自然流路2（東から）

図版3　遺構

1　調査区西側北壁土層断面［東部分］（南から）

2　調査区西側北壁土層断面［西部分］（南から）

図版4　遺物



園池跡出土遺物（2、7、11 は第 3 層出土、1、3 から 6、8 から 10 は第 4 層出土）

報 告 書 抄 録

ふりがな	へいあんきょううきょういちじょうしぼうじゅうさんちょうあとまいぞうぶんかざいはっくつちょうさほうこくしょ
書　　名	平安京右京一条四坊十三町跡埋蔵文化財発掘調査報告書
副 書 名	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	河野凡洋
編集機関	国際文化財株式会社
所　在　地	〒660-0805　兵庫県尼崎市西長洲町１丁目１番15号
発行機関	国際文化財株式会社
所　在　地	〒660-0805　兵庫県尼崎市西長洲町１丁目１番15号
発行年月日	西暦2017（平成29）年３月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 （㎡）	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょううきょういちじょうしぼう 平安京右京 いちじょうしぼう 一条四坊 じゅうさんちょうあと 十三町跡	きょうとし 京都市 うきょうくはなぞの 右京区花園 いぬい 伊 町 41-7	26108	1	35° 1′ 8″	135° 43′ 9″	2017年 1月10日～ 2017年 1月30日	66.00	（仮称）一般財団法人泉谷病院人工透析センター増築工事に伴う

所収遺跡	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
平安京右京 一条四坊 十三町跡	都城跡	平安時代末～ 鎌倉時代	園池跡 自然流路	土師器、須恵器、輸入磁器、近世陶磁器、瓦器、瓦	
要約	園池跡の内部であることを確認したが、州浜は検出できなかった。園池造成以前は自然流路が北東から南西方向に流れていた。				

平安京右京一条四坊十三町跡

埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年月日／2017（平成29）年3月31日
編集・発行／国際文化財株式会社
〒660-0805 尼崎市西長洲町1丁目1番15号
TEL：06-4868-5980　FAX：06-4868-5981
印　　刷／三星商事印刷株式会社
〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
TEL：075-256-0961